
月 刊

MéLange

Vol.130



2018.02.25

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.130 2018.02.25

「月刊めろんじゅ」編集部

詩・俳句

ナイル ……………高木富子 03
 喪失 ……………にしもとめぐみ 04
 こぼれる密林 ……………黒田ナオ 05
 脳に落下する地図は軟体動物である……………千田草介 06
 雑詠(俳句) ……………岩脇リーベル豊美 06
 アレホ・カルペンティエールへ……………野口裕 07
 に月……………安西佐有理 08
 手を握れば——詩人 尹東柱に ……………福田知子 09
 その口ずさみ ……………大橋愛由等 13
 雨漏り ……………中嶋康雄 14
 ある流刑島の話 ……………高木敏克 15
 プラットホーム／用意された椅子 ……………高谷和幸 16
 (HOME 連作) 廊下／台所……………大西隆志 17
 奥底から／あおい景色 ……………北岡武司 18

2018 奄美文学紀行 -②

境界の文学—沖永良部・前利潔の視座から……………高木敏克 10

連載／エッセイ

神戸詞あしび 119 「東と西の極にある半島結ぶ〈悲しみ〉の旋律」……………大橋愛由等 20

編集部日より★49／第130回の「Mélange」例会は、第一部にいきなり詩の合評会。第二部として、中堂けいこさんの詩集『ニューシーズンズ』(思潮社)の出版記念会を開催いたします。「月刊めらんじゅ」詩友の詩集刊行は続き、福田知子さんの詩集も刊行されました。今年はさらに中嶋康雄さんの第一詩集、さらには大橋愛由等の第二詩集も刊行予定です。／忘れてはならないのが、「月刊めらんじゅ」詩友であった富哲世氏の一周年忌が5月26日に迫っていることです。残された詩友で、いかに富氏のゆたかな詩業を伝え遺していくかが今後の課題となっています。詩集、作品集として形をなすには、出版費用もかかることもあって、超えるべきハードルはいくつかあります。／今冬は三回も体調を崩しました。一回はインフルエンザ(B型)にかかってしまいました。今は腹痛をとまなう風邪です。ふんだりけつたり冬です。それでも、1月には、第23回目の〈奄美ふゆ旅〉をこなし、2月19日の〈尹東柱追悼会〉を終え、その旅の成果をエッセイにまとめ南海日日新聞に私のコラム「神戸から」として掲載されます。今年も少しずつ文学的所作を重ねています。そして「月刊めらんじゅ」も今号で誌齢130となります。(大橋愛由等記)

◆ ナイル

高木富子

夜を渡るナイルの満月
夜を航るナイルの帆船

西に行く 埋葬の船
次の世を 再生を
川渡り 西岸へ 死者の国へ 蘇りの国へ 葬送船

太陽を掲げよ スカラベ
太陽神を支えよ スカラベ
古代エジプトの護符 創造再生のシンボルだった
いつしかスカラベ 野垂れ死に

日蝕に ひたすら沈黙し 揺れる人々
弾かれ引き裂かれ 軋んだ多くのもの
日食のことなど 神官たちはとうに存分に詳細に知っていた
無数の思惑 権謀術数 花粉の沈黙 流された血
・ ・ ・そして今も

『消失的地平線』?ここでは 到る処 すべて消失的地平線
ナイルの岸辺から百メートルも離れたら 砂を抱くのみ
(理想郷・シャングリラは?『消失的地平線』失われた地平線ジエイムス・ヒルトン)

日盛り 砂漠は抽象であるか 飛び切りの現実・具象であるか
墓の導入部 前室、墓室 到る処
壁一面に描かれたこの世あの世の事どもは 消えることなく
圧倒され この世の事さえ手探りしても分からない

エジプト鏡 鏡一つ一つに 時が人が宿り映った
異界を映すという ニトクリスの鏡・それは架空の神話のことだが
嘗て さららかだったものたちが ゆゆしいものになる気配

したたかな強靱さと 素朴さ 明るさ ゆがんだ繊細さ
コプトの織物 その断片が親しく温い

背負うものが重すぎるとしても・軽くとも願わず
思惟はやがて乖離していくとしても
書かれたものは残る 描かれたものは残る
そこから生み出される無限の物語
或る意味とても烈しく尊大で狂暴な・
我らは残る

◆喪失

にしもとめぐみ

確か あの春は薄桃色の花が咲いて
庭は穏やかだった
それは何年前のことだろう
もう いつの間にか何もかも
変わってしまった
あの薄桃色の花を付けた木すら……
空を見上げると 青い 白い雲が浮いて
季節はいつなんだろう
ここは地の底
夏には生い茂っていた草が倒れ
枯れ葉が散り落ちて

お面を付けた人が通り過ぎる
すみません すみません

薄桃色のたおやかな花が
手を差し伸べる
ちがう ちがう
あれは誰だろう
もしもし ちよつと
あなたは……
もしかしたら
あの木はいつ枯れてしまったのだろう
心地よい風に吹かれているときは
それが当たり前と思っていた
陽当たりのよい庭があった
一枚の絵のような風景
いつまでも続かない時間

◆こぼれる密林

黒田ナオ

目を閉じて
瞼の向こうにひろがる密林
重なり合う木の枝の
すき間からのぞく星々の目に、さらされて。
カサカサカサ
敷き詰められた葉っぱの
湿る葉っぱの乾く葉っぱの
葉っぱだらけの布団の中で。のそり
獣の気配が近づいてくる。探している
探されている。
じつとしている、布団の中。
近づいて来る、ライオン
の、生臭い息が瞼にかかり
熱い、瞼の裏が
とける。緑色にとける身体の匂いに
包まれて、包まれて横たわる
近づいてくるライオンの牙。
首筋に
噛みつく、噛みつかれる。

噛みちぎる、噛みちぎられる食べられる
うつとりとして
食べられる
食べられていくほどける。消化される
ほんのり燈る。
天井で、豆電球が燈っている。燈されて
噛みちぎられる。ちぎれる身体。
手、足、内臓。
こぼれひろがる緑色。
密林の、ライオンの
灰かに漂う、豆電球。
カサカサカサ カサ カサカサ
暗闇を這う、密林を這う、布団を這う。
湿る葉っぱが足裏を舐める。
声が這う、ため息が這う。
胃袋が這う。消化される。
混じり合う、絡み合う、睦み合う。
消化されていく。蕩けながら、ほどかれて。
ライオンと
わたしの身体とけ合って、崩れる。
豆電球のあかりに
むず痒く、傷が疼く血が疼く。
疼く身体を波打たせ
匂いたつ密林。匂いたつ
豆電球

◆脳に落下する地図は軟体動物である

千田草介

いまは廃屋となった元警察署前の吹きさらしのバス停で「ここはどこですか」と案山子のサンドイッチマンに問われて返答に詰まったのは皆既月蝕とケンタウルス座流星雨の時刻が迫っていたせいなのかもしれないが自分自身もいま居る場所を把握できず火星のタルシス平原で二つの月を見上げつつ呆然とたたずんでいるのと何ら変わりのない状況下にあるからで記憶の地図を引きずり出してみたところでそれは半世紀前の郵便配達夫が公衆便所に置き忘れたものもしくは水道局の区域配管図と小学生が社会科の時間に作成した町の地図をミキサーにかけて味噌汁の具にしたような判読困難なものにすぎずあまつさえ座標軸のみならず時間軸も飴ん棒みたいに螺旋状にねじ曲がっていてDNAの塩基配列のごとき解析に骨折らねばならぬものに化しているからには仮想鏡によってすべてを粉微塵に切り刻んで衣をつけ天ぷらにする以外に迷宮から脱するすべはないのだがそのときには脱出する主体である己れも分子レベルまで分解されているはずなのである。

◆雑詠

岩脇リーベル豊美

冬至の朝に発つ独り王国旅
布団干し母の悲鳴聞くようREM睡眠
雪景色が柘榴色に染まるような
老魔女のあとは吹くだけ今朝の嵐
はじめて使う魔術ドキッと謝肉祭
波動感ずとか魔女会はいつも虚言のみ
愛の魔術かけるは林檎の木の下で
雌鹿横切る車線セイヤッ！ブレーキ踏む
夜ふかく蠢く月の昼照らす
ポーランド貴族末裔イワノフスキと署名
業火の雪が紙媒体に降り積もる
サンドベージュ逆風の雲に穴を開け
この歳の意味を維持してマザーオブパール

◆アレホ・カルペンティエールへ

野口裕

この家のヤツデは
鳥の糞から生えてきた
すっきり大きくなり
顔をつつめるほどの葉が
頭上から垂れ下がる
根はすっきり太くなり
敷石はちよつと浮いて傾きかげん

ふつと
時間を逆に回す光景を思い浮かべたくなった

根の細りながら
敷石が沈みつつ落ち着くところか
葉のしぼみつつ
赤ん坊の手のように
くるくると丸まって蕾になるところか
あるいは丈が徐々に小さく
土からちよこんと先が覗くところか
はたまた糞が空中に飛びあがり
鳥のはらわたにすぼつと収まるところか
どこが面白いだろう
みんな面白いようにも見えるし
時の逆流が当たり前になれば
みなつまらないようにも思える

まこと日常生活はおそろしい
ただいまと
私はドアを開けた

◆に月

安西佐有理

凍て空にこじらせぎみか月蝕は
 電話して停戦に訊く「いま何時」
 缶詰の春わすられて期限ぎれ

かけていくものとみちていくものが、ころびながらみやくうつりずむのあいだをゆきかっていた。ぶんぶん。ぽけつとにいしころをつめて、あなたはみずかがみをのぞくこともしない。すべてがわかったというまぼろし。なにひとつわからないとのまぼろし。Tétとは節のことときづくいまさらは、おそくない。

◆手を握れば

——詩人 尹東柱に

福田知子

花の言葉は
 わたしたちにいかなる後悔も誘わない
 なのに それを読むたびに
 わたしたちの悔し涙は溢れてくる
 時代に押し潰されられた一輪の花の嘆き
 ひきちぎられた赤い花の

手を握れば
 みな、善い人
 みな優しい人ばかり*
 ふゆ はる なつ あき・・・
 そして ふゆ
 さらに ふゆ ふゆ ふゆ・・・
 ついぞ 巡り巡らなかつた 彼の季節

小さな手のひらに握られた種——
 太陽のあるところ
 風のあるところ
 水のあるところ
 それら どこでもいいから
 そつと手をひらいて
 いのちの掌
 だれにも知られずに種蒔きつづける
 しずかな勇気を地面に そつと

たった一人の女を愛したこともなく
 時代を嘆いたこともない**

雪の舞う白い季節に灯る一輪の花
 青空に咲く奇跡の花

* 尹東柱『空と風と星と詩』上野都翻訳「看板のない街」より
 ** 右同「風が吹いて」より

境界の文学

— 沖永良部・前利潔の視座

高木敏克

(一) えらぶ！境界からの思考

えらぶとは沖永良部島のことであり、前利潔氏によると「この島の境界としての特徴は、北からは日本本土と鹿児島、そして南からは沖縄の政治行政の力、近代の力、そして文化の力がぶつかりあう境界空間にあり、これらの力が交差する「場」という点である」

この境界から、いったい何が見えるのか、私は二〇一八年一月一日に鹿児島から、インド料理の「ナン」の形をした「えらぶ」に着陸した。前利潔氏は沖永良部島に生まれ、知名町役場に勤務しながら「無国籍地帯、奄美諸島」など、多くの論考で知られるが、彼の運転する車で島のあちこちを観察させていただいた。南西部がサンゴ礁の浜であるのに対して、北東部の海岸は恐ろしいばかりの深い潮流に侵食されて、陸地が大きくえぐられる形の断崖絶壁になっていた。そのため島全体は半分食べかけの「ナン」になっていて、イーストで膨らんだような丘が二四〇メートルほどの標高となり、大山と呼ばれるところがなんと牧歌的な風景に見

えた。丘の中腹にある島の墓地のひとつを訪れ、その日「墓正月」という墓参の行事があった。墓石の前で親戚縁者が集い、重箱をつつきながら、お湯割りの島焼酎がぐるぐる回る。私は三六〇度めぐる水平線に見とれてしまった。そして、海が陸より高く見える錯覚に酔い、帰るところのない恐怖を感じた。

その晩、知名町のホテルに泊まった私は村上春樹も驚くだろう風の歌に悩まされた。魔界島には境界地獄の風が吹いていた。風は魔女の叫び声となって襲い掛かってくる。なんのことはない。暑くて部屋のドアを少し開けたのでその隙間を廊下の風が吹き抜けてゆく音なのだ。安心もつかの間、窓から波の音が聞こえてきた。もし津波が来たら、海は風のようにこの島を通り抜けるだろう。出来事は本土からは見えないだろう。本土から境界への移動は時間がかかる。この長時間が長距離よりもこの島を孤立させている。

そもそも、日本の国家は、本土の距離と時間を制圧することにより成立した。その結果、単系列の時間につながる歴史空間と統一国家としての大和が内外に認められるようになった。そして不思議なことに戦艦大和は無国籍の境界の海に沈んでいる。

前利氏の話によると、この単系列の時間と空間に統一されないところに境界がある。奄美諸島は沖縄琉球王朝の時空にも統一されることなく、無国籍地帯の境界に存在するということだった。

(二) ヤポネシア史観

前利氏は奄美諸島をめぐる島尾敏雄や一色次郎についても数多く書いている。彼によると、島尾敏雄のヤポネシア論は多系列の時間を総合的に所有する空間概念として存在するのがヤポネシアであるとす。つまり、島尾の奄美諸島に対する空間概念は、歴史認識により、時空概念として止揚されたと言わざるをえないが、私にはヤポネシア論は次のように日本を読みなおしているように見える。

本土にも多系列の時間があり、統一時間以前の縄文時代からの多系列

の歴史時間を読みなおすと、国家史観的な歴史認識を民衆史観的潮流のダイナミズムに裏がえした。

奄美諸島の旅を終え、神戸に帰ってきた私は考えた。ヤポネシア論は史観であるが、そのヤポネシアの海に向けて広がる神戸は一見すると多国籍都市に見えるが実は無国籍都市ではないか。神戸は古代から中世、近代、現代にわたる多系列の歴史を重ねている都市である。また、多国籍の船舶を迎える港湾都市の本質は無国籍ではないのかとおもえる。すると、奄美諸島と神戸は繋がって見えてくる。多国籍に接する港町神戸も境界の無国籍地帯であり、多系列の時間を含みつつ、無国籍の奄美諸島と表裏一体の関係となる。あとは、双方に境界の文学を打ち立てるばかりであると思つた。神戸はその名の通り、そもそも無国籍の神々のゲートウェイであり、島尾敏雄のヤポネシア論を多系列の時間を総合的に所有する空間概念として受容する本土の拠点として神戸をとらえることはまんざら悪い考えではないように思えた。そのためには、根源的な文学としての神話の世界を辿らなければならないと思つた。

(三) おのころ島

沖永良部島の創世神話「島建てシンゴ」は七世紀から八世紀ごろ創世神・島クブタを主題に国土創世から人間誕生、そして穀物の起源までを描くことで物語としての体系的な完結性を持つている。(前利潔「無国籍の奄美」二〇〇三年八月「論歴」より)

同じような記述は古事記の中の「おのころ島」にもある。淡路島の自凝島神社があり、さらにまた、淡路島の南西に勾玉の形で、ひよっこり浮かんでいる沼島にも自凝神社がある。沼島に行くには、あわじ市の灘の土生の港から連絡船が出ている。一五分程揺られると沼島港に着く。名物はハブ料理ではなくハモ料理である。いかにもこの辺りはその昔に境界の島辺りから時間をかけてやってきたシマンチュウがハモとハブを見間違えたのではないかと思える雰囲気がある。沼島港から南に海岸沿いに歩き、細い山道を十分程登った丘の上に自凝神社がある。沼島は空から見ると勾玉の形にもインドの「ナン」というパンにも見える。この島の形

状は沖永良部島に実によく似ている。おそらく、古代人には国造りの神の島ではなかったのではないだろうか。人口はすくなく四七〇人程度であるがハモ料理の季節には十倍の人口になり、宿泊が困難となる。

この島では風が大きく行き違い、島の北と南では風向は全く異なる。島は潮流が激しく行き違い渦潮から島が生まれたとする古代人の発想の磁場である。島があるから潮流や風が行き違うのだとする因果律は近代人の発想である。そもそも、島はなぜそこにあるのかという古代人の問いには何も答えていない。神のみぞ知るその答えに島人は古代よりしがみついて生きてきた。ここは鳴門秘帳・幕府打倒の陰謀の舞台に近く、鳴門海峡の東の入口にある阿波との境界の渦潮の孤島である。

(四) 境界とは何か

そもそも、境界とは何なのか？ 境界というものはあるのだろうか？ あるとすれば何と何の境界なのか、ここで見極めなければならぬと思つた。境界とは見えるものではなく感じるものではないのかとも思つた。私が個人的に感じてきた境界とは海峡の二つの潮流であり、そこでは二つの流れがひしめき、行き違っている。

海峡に立ちつくすと、そこでは境界は「もの」としてあるのではなく、「こと」としてある。つまり、境界というものはない。境界ということならある。

何と何の境界だろうという第一の問いの答えはすぐに出た。文化や行政の流れと流れが行き違ふことが境界現象なのだ。境界とは絶えず生き動いている。

島は潮流が激しく行き違う場所であり、渦潮から島が生まれたとする古代人の発想が間違いだとする根拠はない。島があるから潮流や風が行き違うのだとする因果律は近代の発想である。そもそも、島はなぜそこにあるのかという古代人の問いにはなにもこたえていない。境界があるから島があるとすれば、総てがすつきりと理解できる。島があるから海流があるのではなく、海流があるから島が生まれた。男と女がいるから男と女は食い違い、恋愛がある。リアリティとは行き違ふことである。

例えば、吉本隆明が島尾敏雄の文学の根拠は異和にあるという場合の吉本の境界のとらえ方は「もの」である。吉本の限界は、言葉をもととして（表出として）とらえるところであり、言葉とは事の流れそのことであり、そのものではないということが分かっていない。つまり。ものは理解できてもこの流れが理解できていない。ものの道理を説くことはできても、この流れが表現できないのは、彼には小説が書けないということをお話している。

小説も書くサルトルがマロニエの幹の肌を見て感じる吐き気はこれとは違う。小説「嘔吐」の中のリアリティーは単なる異和を超えた意識の流



沖永良部島における学習会。前利潔氏（奥）は、近代以降の沖永良部島出身者のヤマト（本土）における動向を発表。高木敏克氏（左）は同島出身の小説家・一色次郎の作品世界について発表した（2018年1月15日）



奄美大島での語り合いの会。この席で大橋愛由等、高木敏克、北岡武司三名による奄美旅行で創作した即興詩が発表、朗読された。沖永良部島から前利氏、徳之島からは俳人の巨余世夫氏（右）らが参加した（2018年1月17日）

れの発動であり、サルトルの実存体験は「これで書ける」ということであり、作家のリアリティーは。そこまでである。そこには書くことと読むことの境界がある。書くことの責任は「書ける」というところまでであり、それを読んだ読者は「これで生きてゆける」というリアリティーの権利を得ることである。このことは、神話においても同じことである。神話はなぜ存在するのかを説き、それを知って人々は生きる。

文学とは、書くことと読むことの行き違いの境界である。

◆その口ずさみ

大橋愛由等

風に追われ
たどりついた
あからさまな
ガラス張りの
建屋に
閉じこめられた
ムクドリは
いくども
思慕する
冬の無尽めざし
ガラス戸に
衝突しては

うつぶし
目眩して
立ちあがれず
超えられぬこと
移相できぬこと
転位できぬこと
の
受容できない
さまを
見ているだけの
わたしと
わたしを
追いかけてきた風は
顔を見合わずことなく
裸木の陰に
昨夜から
隠れているつもり
の
星の吐息が
わたしたちに
語りかけていることに
振り向けば

ムクドリの
つむぐ
頌歌を
くりかえし口ずさみ
ようやく
まなかいを交わした
わたしと風の
むこうには
翅がついた
悲しみが
わたしたちを
直視して
頌歌を
わたしたちは
移相し転移し超自し
さえずることが
できるのか
じつと
うごかず
みつめて
いる

◆雨漏り

中嶋 康雄

瓦屋根の上を歩くと
猫のとなりに雨漏りが座っている
猫が眠そうに瓦を吐き出している
蜂が瓦の裏に巣をつくる
雨漏りが蜂の子をつるりと飲み込むと
そろそろバケツか金盥に
追い金を
雨漏りがおりてきて
畳の上でも
膝を抱えて座っている
もう追い出してはいけない
婆さんが一心にお経を唱える
婆さんの肋骨がひび割れる
雨漏りが隣に座って
婆さんの頭を撫でる
爺さんにも撫でてもらったことがないこの頭
仏さまは遠いから

雨漏りに撫でてもらう
瓦の欠片が地面で見つかる
空を見上げる

もうすぐ雨が降る

雨漏りがまたおりてくる

今度はどこの蜂の子を差し上げるのか

屋根瓦の親分と練らねばならない

雨漏りが座る新しいお座布団を

隣の駐車場のくさむらで

キチキチ飛ぶ生きのいいのを捕まえてくる

婆さんの魂もキチキチ飛んでいる

網を被せて捕まえなければ死んでしまう

草に桃色の小さな花がついている

お座布団をふたつ捕まえて

押し花にでもしてみれば

雨漏りは喜ぶかもしれない

お酒がすすむかもしれない

するめいか雨が泳ぐので

掬い網を用意すれば喜ばれる

醤油と生姜を忘れないように

戻った婆さんが目配せをする

◆ある流刑島の話

高木敏克

その島はなぜかある！と横目でフクロウは夜の海峡を渡りながら力を何匹か飲み込んであぐびをしたのち、その島はなぜあるのか！と夜の森におりると、夜のガラスがなぜか！では済まされないぞ！と騒ぎ出し、流刑の島に決まっているじゃないか！この島は死ななければ渡れない！じゃあ、お前は死んでいるのか！当り前じゃないか、死んでいるに決まっている。海辺のわたしの墓はなぜか狭い喫茶店のテーブルの下にあるのだ！とカラスはフクロウを引つ張つてゆき、海辺のなぜか？なんてふざけるんじゃないよ！と叫んだ。

その死はなぜかある！と横目で見ながらワタクシは夜の海峡を渡りながらキを何匹か飲み込んであぐびをしたのち、その死はなぜあるのか！と夜の床におりると、夜の父と母がなぜか！では済まされないぞ！と騒ぎ出し、流刑の島に決まっているじゃないか！この島は死ななければ渡れない！じゃあ、あなたも死んでいるのですか！あたりまでですよ。わたしたちの墓はなぜか深い洞窟の裏に隠れていてなぜか夜にならないと現れないのです。

じゃあ、なぜかの機械をつくらなければなりませんね。それがせめてもの供養となるものですから！島も死も単なる概念ではないものですから、具体的な発明品として作り上げなければなりません。この島にはそもそも概念というものがなくて、誰も概念を見たことがないものですから、本土人のように発明をして特許許可局にお供えしなくてはなりません。この島の人たちは概念を発見することはできなくても、概念から具体物を発明することはできそうですから！

夜の海峡は見えないが、なぜか深い二つ海流が喰い違い、暗い闇を盛り上げていた。なぜかの島はそのようにして生まれたのです。

◆プラットホーム

高谷和幸

わたしは
セメントのほつれ目のような
ゆるんだ靴下をはいていた
乗り物が
まだ着くことのないプラットホームにいる
そこは何十年も通い
今日が何回目の今日か分からないぐらいに
プラットホームはそれに属している
あなたが言うことになった
「原子のさむさしか残らない」
河のほとりと同じように
初めからそこにあつて
もとに戻っていく
セメントに覆われたホームの
ほつれ目から蘚が生えて
ペルソナは乾ききってしまった

◆用意された椅子

高谷和幸

まなざしの曲がり角ごと
まなざしの窓に立つつど
わたしの場所は呼吸を止めてきた
こんなところまで鈴の音が聞こえる
わたしを指名した子らは夢中になつていて
わたしは腰をかかめ
手を水平にまわす
リニアなものは切断され
そこにあつたものと
ここにあつたものとが
違う名前で呼ばれる校庭
手を引かれて
わたしのために
道の中に用意された椅子がある

◆廊下 (HOME 連作)

大西隆志

コーヒークップを手にして右側の部屋に行く
明かりが点いてはいるが誰もいない
ハイドンのカデイスの司教との手紙のやりとりのことを思いながら
廊下にもどり横積みされた本の表紙を横目でながめ
左側の部屋の机の上にカップを置いた
また短い通路、鳥が飛び立つには高さがない
枯木か流木のオブジェが壁から突き出している
ただの、人がゆきかう空間にしては、床
が主張をはじめ、のどがかわいた
ピカピカに磨かれた川を手本にした通路に
足を踏み入れているのは朝日なのか、夕日なのか
夕陽が昇り始めていることにあわせるように
下校のチャイムが町中に鳴っている
とどまることのできない場所で靴下を濡らしながら
手紙をポケットに入れていることを忘れてしまったようだ
教室からはみだした時にすべてが終わったわけでもないのに
子どもも年寄りも直立不動で並ばされている
奥の部屋には何があるのかしら
長い長い廊下を進んでいくのはあちらの世界
からの、残像なのか
歓待される詩的な主題は
コトバの通路に過ぎないのだと、語った先では
砂嵐に悩まされている
巡礼の進む数メートルが大変
跛行に慣れないのは、コーヒークップにもう一杯を
たのんでしまったからだ
入るべき部屋には
拭き取られた徴がいたるところにあつた
廊下で深呼吸しながら
割れた水素を口に含んでみようか

◆台所 (HOME 連作)

大西隆志

給水塔が青空につきだしている
団地の公園のベンチに寝そべって
高圧のたわむ現象の鉄塔にぶら下がってみた
指の間に視線をかさねながら
振動する時間は誰のものでもない
洗い物のたまった台所のシンクにも
水洗から勢いよく流れ出す水圧へのぶら下がり
身体を貫通する管の端つこまでを
くたくだと思考しているよう
日々の労苦から解放されたのは
瓶に詰められた白骨の行方
ポウルに溜まった水で落とされていく
天井の雲は流れている
少し湿気ついているようだが
回転音につられて食物の輪郭や匂いが運ばれていく
木片を削った匙には
刻まれた死の歓待を受け入れさせる手管のオイルを塗り
口から、手に移され
尖った物に問いを投げかけてみる
消えたカマド、鱗のない魚、血抜き肉の塊や
たくさんの皿が並べられなくなつて久しい
磨かれた調理台には神なる者が千切ったコトバの部分
幸いなる糞尿ものがたりは読み手を失つて
火と水に新たに電磁の罠に囚われていく
少しの時間だろうか
棚にぶら下がって待つことにするか
僕らの経済の通路は頼りなくなり
飢餓の怒りさえ忘れて、超高度資本主義社会
巧みな蠟細工の食物を作りつつける

◆奥底から

北岡武司

ブナたちが
雪の毛布を
身にまとい
目を瞑り
ものいいたげに
押し黙る
空も雪雲に覆われ
息をのんで沈黙している
消えゆくかすかな
鈴の音に
耳を澄まし
心鎮める
ロリンゴ ロリンゴ
ロリンゴ
かすかかすかに
コロボックル楽団の
演奏とコーラスが
闇と沈黙の底から

立ちのぼり
森の精の声が
湧きあがる
夜は深まり
音楽隊の熱気は高まり
鈴の音は消え
妖精たちの妙なる熱気が
地の底から立ちのぼる
ロリンゴ ロリンゴ
ロリンゴ

雪の声が
ブナの静まりのむこうから
雲の沈黙のむこうから
囁きかける
着ぶくれた木々の枝に
天使たちもとまり
聴き入っている
樹氷林も耳を澄ませ
私も耳を澄ませ
辛口の酒を飲む
ロリンゴ ロリンゴ
ロリンゴ

◆あおい景色

北岡武司

あなたはならんでベンチに座り煙草をふかす。煙を吐きだしとつぽつとつと低い声で語る。焦げ茶の革ジャンは背中では十一月のきつい光を撥ねかえし私を撥ねかえし世の中を撥ねかえしなにかも遠ざけ遮断する。それでも眩(まばゆ)く光あふれる青の景色に恋人とふたりいられる幸せをいまはかみしめていよう。この男とどこまでも一緒にいけたら嬉しからう。人生の陰もシミも消えてなくなるかもしれない。

うちとけてくれれば きょうの日のように天にも海にも一点の翳りなくはれやかに満ちたりていよう。空を湛えた海面は行き交う船を支えしろうい航跡を何本もやどし爽やかだ。自分と島とが海のうえを動いていよう。ふたりの陰がはなればなれに黒く映る。あなたのまえにもわたしのまえにも陰…… 分かたれてくつきりと濃く染みつきふたりを見ている。「お前はお前だ」と言いたげに ふたりは別々だと。

妹と父母はどの方角かとあなたを見れば 空は端つこまで澄み 生駒や六甲さえ青澄(あざ)み いくつもの街がひとつになって湾を囲み 景色は溶け千里も吹田も分らない。どこかに妹は父母と貧しく暮らす。多分六甲のかなたに。そこから私は鉢伏のその向こう摩耶の麓に部屋を借り遁走した。二十一で体だけ生きている妹を父母に押しつけ肉親を置き去りにしまつしるな航跡にシミをつけた。消せない陰ができた。

千里とはいえ摩耶からは目と鼻の先 アクセル開けばいつだって駆けつけられる。そう思ってた。父にも母にも何があるかわからない。私だつて時々妹の口元にスプーンを運んでやり おむつを替えてやりたい。お風呂で髪の毛や体を洗ってもやりたい。きもちよさそうな顔が思い浮かぶ。嬉しがっている。三歳までは年相応に喋るようになっていた。今では知能は一歳 と医者言う。

ネータータンネータータンと抱きついてきた魂が一歳に戻ってしまったのか。はるかむこう橋桁あたりで潮が騒ぎ小さな波頭ひろがり 鯨の群れのように風にさざめきなみだつ。青を湛えた海面 対岸の町並み すべてが明るく 情景も透明で晴れ晴れとしているのに横にいるあなたは糸が切れた凧のよう。ついて行けない。見るだけ見られるだけ 触れない触れられない。人を抱きしめない。人に抱きしめられない。

男はそんなものかと ちよつと右によるとからだは離れているのに陰は肩から下が伸びてくつついた。時々ツリングにでてバイクに跨がった後ろ姿をメットのシルド越しにみて追いかけるだけだ。いつも距離を置いてどこへ飛んでいくやら……。ほんとうは私だつて凧にでも雲にでもなつて世界中ふらふらと飛んでいきたいのに。走りまわりたいのに。一緒にノルマンディーや北ドイツの海岸を走りたい。

森や教会が丘の上をかざるといふ村もワイン畑も その腰にしがみついてタンデムで走りぬけたい。でも私は私のマシーンに跨がっている。女はバイクの上でも大地に根をはる。それでいい。妹を見捨てたらそれこそわたしは根なし草、抛つて立つ地面を喪う。ついぞ心に触れたことのない男とここにいます。船はそれぞれの痕跡を描いて近づき遠ざかり港に入り港をでてゆく。

うた 神戸詞あしび

119-2018.02.25 大橋愛由等



〈2018.2.19 尹東柱追悼会〉において韓国から参加した画家イ・ムソンさんの作品（横断幕）をバックに演奏するフラメンコギタリストの福嶋龍児さん

考えてみると、ユーラシア大陸の東端と西端の半島である。朝鮮半島とイベリア半島。いずれも半島の向こうには海峡をこえて異国があり、両半島ともその異国から侵略を受けている。

合同主宰の盟友である詩人・金里博氏が体調悪化のために、六回目となる尹東柱追悼会は、今年にかぎり私・大橋愛由等が個人で呼びかけることになった。

去年がちょうど尹東柱の生誕百年にあたることから、追悼会も規模を大きくして開催した。今年も例年の規模にもどし肅々と開催する予定にしていたが、今年はじめて参加する人もいて、それなれに充実した追悼会になったことは呼びかけ人であるわたしも安堵するところであった。

追悼する場所はいつも決まって京都市上京区にある同志社大学今出川キャンパス内の尹東柱詩碑前である。同志社の卒業生であるわたしは、この追悼会があるために毎年一回は母校を訪れることになっている。

今回追悼会で詩碑前で演奏してもらったのは、フラメンコギタリストの福嶋龍児さん。尼崎出身だが今は京都に住み活動の拠点としている。どこからか彼も同志社出身であ

東と西の極にある半島 結ぶ〈悲しみ〉の旋律

ることを聞き及んだので、先輩風をふかして後輩の龍児さんに無理を言って演奏を依頼したのである。

演奏したのは三曲。そのうちの一曲はわたしのリクエストで「ソレア」。(悲しみ)という意味である。寒空の下、龍児さんの悲しげでありかつ力強さのこもったフラメンコがキャンパスに響く。尹東柱は聴いてくれていたのだろうか。

フラメンコは不思議な音楽と踊りである。インドを出自とするジプシーたちの先祖が歩き歩いてヨーロッパにたどりつき、東欧ではロマと呼ばれた。彼らはロマニ語を共通語として語り、音楽を生活の糧のひとつとして非定住の毎日を送っていた。先の大戦ではアーリア民族の優位性を説くナチスによって、ジプシーたちは、ユダヤ人とともにホロコーストの対象となって収容所に送られ大量虐殺された。

収容所の中のロマのひとりたちは互いに助け合い、強い結束力をみせたと書物に記されている。

さて、ジプシーたちは東欧からさらに西に進みピレネー山脈を超えてイベリア半島に到達した。スペインである。かの地にはホタ (JOTA) という豊かな民俗芸能が各地にある。ジプシーたちはホタの要素(歌や踊りやカスターネット、ギター奏法など)を巧みに取れ入れたのである。そして最終的にたどりついたスペイン南部のアンダルシアの歌舞(たとえはセビジャーナ)を自分たちの芸能に取り込んでフラメンコを作った。

つまりフラメンコはジプシーたちがピレネーを超えなければ生まれなかったと言えよう。ピレネーを超えてこそジプシーたちはフラメンコを作り出したのである。ジプシーたちはどこに行ってもストレンジャー(よそ者、あるいはマレピト)であり、大地に生きながらも、その場所・その土地その形に固着する必要がなかったため、通過した地域で展開されている芸能のエッセンスを取り入れたのである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.130
神戸

2018年02月25日 通巻130号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税別)